

# 論理的思考を支える「価値づけ力」を育成する学習指導の工夫

Logical thinking behind the “power of judgments for value” of teaching ideas to foster

次世代教育学部学級経営学科

阿部 秀高

ABE, Hidetaka

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：価値づけ，論理的思考力，言語活動，学習指導の工夫

**Abstract** : The purpose of this study and practice, the teaching aims to develop logical thinking is the foundation for the development of expressive activity by enhancing Wisdom thinking is an important language in the elementary school curriculum guidelines it is a way to materialize. Therefore, the information “power of judgments for value” thought to be behind a core of Logical thinking, and that “power Dzuke value” we have clarified the ideas of language activities are done there and teaching aimed at fostering is. Specifically, the description of the fourth grade, “to protect the turtle beach” (Tokyo Shoseki) unit for teaching the “original brochure to explain the turtle,” based on the practices of the pamphlet is a language activity made through their descriptions of children and making “judgments for value” from the way of “power of judgments for value” examined the rise of logical thinking behind the “power of judgments for value” will reveal the reality of it.

**Keywords** : Judgments for value, Logical thinking, Language activities, Ideas for teaching

## I. 本実践研究の目的

本研究および実践の目的は、小学校学習指導要領において重視されている言語活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成の基盤とされている論理的思考力を育成することを目指す学習指導のあり方を具体化することである。そのために、情報の「価値づけ力」が論理的思考の中核としてそれを支えるものであると考え、その「価値づけ力」の育成を目指した学習指導とそこで行われる言語活動の工夫について明らかにしていくものである。

情報の「価値づけ力」とは、学習課題の達成のために自らの考えや成果を論理的に表現するために必要な情報を価値づけ、選び出す力として仮説的に設定したものである（図1参照）。この「価値づけ力」の育成は、情報を価値づけ、その価値づけに至った理由、根拠を表現することにおいては論理的思考力の育成と重なる部分が大きい。論理的に考えることの中に「価値づける」ことが含まれるという関係である。つまり、本研究においては、論理的思考力の中でも、「価値づ

け力」に焦点化し、それを集中的に鍛える学習指導を行うことによって、論理的思考力の育成がより効果的に行うことができるというのが、本研究の着眼点である。さらには、価値づけを行う過程において行われる思考を可視化するに当たってはその価値づけの理由、根拠を説明するための論述を行うことになるので、論理的な記述力の育成にも大きな効果が見込まれると考える。

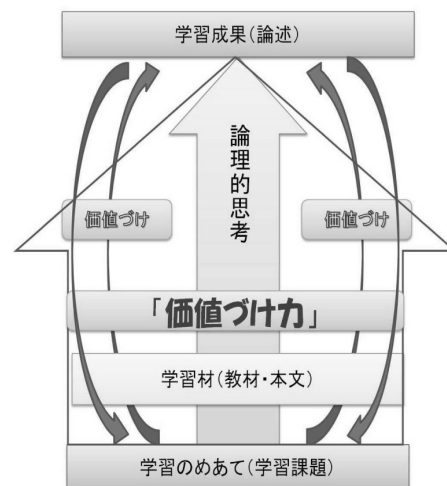


図1. 「位置づけ力」構造図

## Ⅱ. 論理的思考を支える情報の「価値づけ力」とは

現代の高度情報化社会においては、あふれる情報を正確に捉え、その情報を双方向的なコミュニケーションを通して吟味し、自らの考えを創りだし、表現することができるいわゆる情報活用能力が求められる。情報を自らのために活用するためには、まず、情報の内容を正確に捉えることが必要になる。そして、その情報が自らにとって、どのような価値があるのか、ということ来判断すること、それが、自分の考えを整理し、筋道立てる上で重要となる。つまり、情報の「価値づけ」によって、構造化することが次の段階にある論述につなげることができるのである。この論述は論理的思考の可視化であり、論理的思考力の育成に向けては、この論述を学習過程に設定することが有効である。

本研究においては、自らの考えを論述することを前提として、情報を取り込み、その情報を論述する上での価値を見極めること、つまり「価値づけ」が、論述の構成を決定することであると考えた。そうした論述をする上では、構成、いわゆる筋道をつけることが論理的思考の中心になる。そこで、論理的思考を支えるのは、自分にとっての情報の「価値づけ」を行う力＝「価値づけ力」であるという仮説のもと本研究を行うことにした。

「価値づけ」について、ジョン・デューイは「価値づけ論」の中で、

価値づけは何らかの問題、取り除かねばならないある困難、改善されねばならない何らかの必要、欠乏、ないしは困窮、現状を変えることによって解決される何らかの傾向性対立があるときにのみ生起するということを証明するからである。この事実を翻って、価値づけがあるときはいつでも知性的要因－探求的要因－が存在していることを証明する。

と述べている。つまり、「価値づけ」とは、知性的、探求的な必要に迫られたときに生起されるものであるということを述べている。また、デューイは、「価値づけ」が生起される場面について次のような具体例を挙げている。「輝いたなめらかな石を見つけた子どもの場合を考えてみよ。彼の触覚と視覚は悦ばされる。しかし、それが何がなされるべきかという問題が起きるまで、つまりその子どもが偶然思い当たったものを珍重するまでは、何の欲望も目論見もないのだから何

の価値づけもない。彼がそれを貴び大切に瞬間、彼はそれを使用に供し、それによってある目的に対する手段としてそれを使用する、そして、彼の成熟次第では、それをその関係において、つまり目的に対する手段として評価したり価値づけたりする。」つまり、「価値づけ」が生起されるのは、ある事象に対して、自らの欲求や目標に対する価値を見だし、欲求の充足や目標の達成のためにその事象の必要性を認知したときということである。そして、最後にデューイは「価値づけの理論はそれ自身、知的ないし方法論的手段であり、そのようなものとして使用する内に発展され完成されうる」というように「価値づけ」を方法論として使用することによって、発展され完成されるものであることを主張している。つまり、「価値づけ」を一つの方法論として捉えるならば、その方法論を活用する力として、「価値づけ力」と定義することが可能ではないかと考えた。この「価値づけ力」は、デューイの述べていることから考えると、次のように定義できる。

「価値づけ力」とは…

ある情報が自らの目標に向かうために上でどのような価値を持つか、さらには、その価値を認めた上で、どのような位置づけをするのかを決定する力であり、その決定に従って、目的を達成するための行動を行う力

この「価値づけ力」を学習活動において発揮させるということは、自分の考えや成果を表出する場面において、考えや成果に至った根拠や理由を明らかにすることである。つまり、自分の考えを論じることが論理的思考を行うことそのものであるとすれば、その自分の考えの構築は、目標達成のために必要な情報や事象の「価値づけ」によって行われる。つまり、学習活動において、「自らの考えを論じる＝論理的思考」を行うためには、「価値づけ」が重要な手段として働き、それを行う力である「価値づけ力」が論理的思考の中核となり、「支える」と言うことに他ならない。

## Ⅲ. 「価値づけ力」の仮説的設定

本研究では、思考力・判断力・表現力の育成を具現化する学習活動の工夫を明らかにする。そのために、学習課題（学習のめあて）に論述を行う学習を設定し、その論述を行うための論理的思考の具体的な思考方法としての「価値づけ」の内実を明らかにすると

もに、そこにおいて必要とされる「価値づけ力」の具体的な育成の方法を具現化していく。それらを通して、「価値づけ力」の育成が、子どもたちに確かな論理的思考力と論述力を身につけさせることができることを確認し、論理的思考力の育成を目指した小学校国語科の学習活動の工夫のあり方の一つとして提案を行う。

そのために、これまでに行われた国語科実践の中から、情報の「価値づけ力」の育成につながる学習活動の工夫を見直し、工夫を考えていく必要がある。どのような工夫を行えば情報の「価値づけ力」を育成することができるのかについて、よりよい工夫を学習指導の中に位置づけ、その工夫の具体的な手立てや学習における位置づけなどについて検討を行う。こうした実践における工夫の成果から、その効果を明らかにする。さらには、工夫の内実を明らかにした上で、実際に小学校において情報の「価値づけ力」の育成を目指した実践に取り組み、子どもたちの論理的思考を支える情報の「価値づけ力」の有り様を具体的に検証していく。実際の学習活動の中で生起された子どもたちの「価値づけ力」の内実を探っていくために、学習活動の中でも特に問題解決する過程において行われている思考・認識に焦点化し、具体化していく、というのが、研究の方法とプロセスである。

実際に行われた授業実践を分析するためには、次のような指標を用いる。

ブルームの教育目標（認知領域）		PISA型読解力のプロセス	
①知識	学んだ時と似た状況で、情報考え、原理を再生・再認できる	書く・項目をあげる・名前を言う・名付ける・述べる・示す	情報の取り出し
②理解	既習事項に基づいて、情報を換言・解説・解釈できる	説明・要約・言い換え・記述・説明	
③応用	問題や課題を解くために、あまり指示されなくても、原理やデータを選択・変換して利用できる	利用・計算・解決・演示・適用・構成	
④分析	見分け、分類し、仮定・仮説・根拠あるいは文や問いの構造を述べられる	分析・分類・比較・対比・切り分け	熟考・評価
⑤総合	考えを生み出し、統合し、組み合わせ、本にとって新しい作品・計画・提案を創る	創造・デザイン・仮説立て・発明・開発	
⑥評価	規準や基準に基づいて、評価・査定・批評ができる	判断・推奨・批評・証明	論述

上の表組みは、論理的思考力の育成を目指して、思考や認識の過程を段階化したブルームの教育目標とPISA型読解力のプロセス「情報の取り出し—解釈—熟考・評価—論述」を融合し、その過程の中に「価値づけ力」を仮説的に設定したものである。

この2つの指標を組み合わせて仮説的設定を行った理由としては、「価値づけ力」が自分にとっての情報の価値について吟味を行うという点において、ブルームの教育目標における、「分析と総合」と重なり、PISA型読解力のプロセスにおいては、自分の経験や既有知識とのすりあわせによって、情報に対する自分の考えを生み出す「熟考・評価」と重なると考えたからである。そして、それらの過程を経て、「論述」に向かっていくのである。

ブルームの教育目標は、学習指導においては、目標分析など、教育評価の一つの規準の指標として、活用されることが多い。学習における認識の過程を一般化し、段階を明らかにしたことによって、単元学習などにおいて、認識の深まりをもたらし学習過程の作成において、有効だからである。さらに、近年のPISA調査におけるOECDの求めるグローバルスタンダードと言われる学力の育成においても、PISA型読解力のプロセスとの共通点を考えると、必要な指標であると言える。今回仮説的にこの2つの重なり部分をあえて「価値づけ力」の育成の段階として設定したことは、この2つを学習指導において、より実践的に位置づけることをねらったことである。

このように、本研究においては、「価値づけ力」が生起されている学習場面に焦点化し、「価値づけ」がいったいどのような思考に基づいているのか、ブルームの教育目標とPISA型読解力のプロセスとのすりあわせによって明らかにしていく。それらを通して、「価値づけ力」の論理的思考力を支える思考の内実としての重要性について明らかにしていく。

#### IV. 「価値づけ力」の育成を目指す学習指導の工夫

##### ○単元名

「パンフレットを説明しよう」～説明文「ウミガメのはまを守る」(東京書籍4年下)

##### ○単元の構想について

##### ①情報の「価値づけ」を行い、その根拠・理由を説明することができるために

説明文を中心教材として、単元学習を構想する上では、どのような言語活動を具体的にに行わせるかを決定し、その言語活動を行うために必要な情報を説明文から取り出し、その活用を行う場の設定が必要である。まず、内容の読解においては、PISA型読解力のプロセスに従って、説明文から情報を取り出し、その内容



を解釈をおこなわせる。そして、言語活動において活用するために、そこでの情報の有用性について吟味を行う。それがPISA型読解力のプロセスでいうところの熟考・吟味である。その吟味をもとにその情報を発信していくのである。これが論述に当たる。これらのプロセスにおいて子どもたちの頭の中で行われている思考活動は、ブルームの教育目標に照らし合わせると④分析、⑤総合に当たる。この「分析」「総合」に当たる思考活動をさらに絞って考えると、まず分析は、説明文からの情報を自分の発信を意識した上で「価値づけ」を行うこと、そして、その価値づけの根拠となる叙述を明確にしたり、その価値づけの理由を自分の言葉で表現したりすることである。指標の中で言うところの、「創造」に当たると考えられる。そして、「総合」に関しては、価値づけた情報をその価値に即した形にして、工夫して発信することである。指標で言うところの「デザイン」である。今回の実践では、これらを学習の中で無理なく行えるように単元構想を工夫し、計画した。

## ②説明文「ウミガメのはまを守る」について

今回扱う教材「ウミガメのはまを守る」は、東京書籍4年下（平成23年度本）に掲載されている説明文である。子どもたちにとって、ウミガメという興味を引く題材を取り上げている点、書かれている情報の価値判断を行いながら、段落相互の関係をとらえるための学習を行うために適している点などにおいて4年生にとって価値ある教材であると言える。

具体的に本文で筆者は、静岡県御前崎町の開発に伴う浜の変容によるウミガメの危機的状況、ウミガメを守るために働く保護監視員の努力、御前崎の小学生のウミガメ保護への努力へと述べることによって、ウミガメの保護のための環境保全の重要性を訴えている。

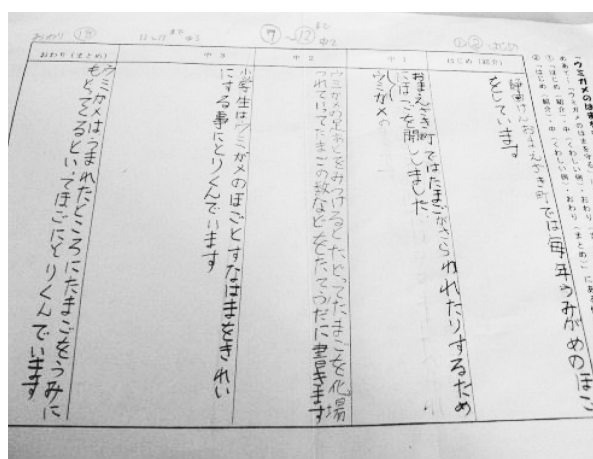
本文は大きく、次に挙げる3つの情報に分けることができる。

- ・ウミガメの浜の危機的状況
- ・ウミガメを守るために働く保護監視員の努力
- ・御前崎の小学生のウミガメ保護への努力

これらの情報は、ウミガメの浜を守ることにについて、どれも重要なものであることは、全文を音読していくうちに子どもたちにも容易にとらえることができる。そのことは、全文通読後に、書いたワークシートが示している。子どもたちは、これまでの説明文での学習において身につけた「はじめ—中—おわり」の構造をとらえること活かして、次に示すワークシートに

この段階でとらえる情報をまとめることができた。このワークシートでは、文章全体を「はじめ—中—おわり」に分け、さらには、「中」の部分にある具体例を3つの情報に切り分けている。そして、読み取った内容を一文程度でまとめている。（写真①）

これは、既習事項を活用して行っていることから、子どもたちにとっては、すでに身につけた言葉の力の活用によって行われたものであると言える。



写真①：文章を全体を俯瞰し、文章構成をとらえるシート

しかし、このような言葉の力が身についてきた子どもたちでも、全文通読の終わった段階では、ウミガメの危機の状況の本当の深刻さやその原因、保護監視員や小学生が行っている保護活動の大変さという情報の本質的な価値をとらえるまでには至っていない。そこで、子どもたちに、「パンフレットで伝えたいと思ったことは見つかったか？」と問いかけ、「もっと、伝えた人がびっくりするような情報をパンフレットに載せたい。」という学習の必然性を導く。そうした必然性の喚起を行うことによって、それぞれを詳しく読み深めなければならぬ、というめあてを子どもたちと共有していくことができるのである。

子どもたちの言う、「伝えた人がびっくりするような情報」として、本文から読み取るためには、それぞれの情報の価値を吟味し、比較しながら、類推することが必要である。例えば、ウミガメの危機については、大きく2つの原因があり、それらはかなり密接に入り組んでつながっている。1つ目は、防潮堤・道路の建設による浜の面積の減少であり、2つ目は、浜につながる大きな川の上流にダムが造られたことである。子どもたちにとって1つ目についてウミガメの危機との因果関係は、卵を産む場所としての浜が狭くなったということで、容易にとらえられるだろう。と

ころが、2つ目のダム建設による運ばれる砂の減少がウミガメの危機になぜつながるかは、卵を産むための穴が深く掘れないために、卵が波にさらわれたり、動物に食べられたり、車にひかれたりするという事実を順序立てて、そのつながりを考えなければ、因果関係をとらえることは難しい。このような情報の裏側を書かれてある叙述から類推することができる内容が、本文の「中」に書かれている3つの情報すべてに存在する。子どもたちは、それらを「伝えた人がびっくりするような情報」として、伝えたいという思いを強くすることができる。つまり、この「ウミガメのはまを守る」という教材は、パンフレットを用いて読み取った情報を工夫して伝えるという言語活動を行う上で有効な教材である。さらに、情報の内容とその書きぶりを吟味することによって、それぞれの情報の本質を読み取り、その「価値づけ」を行うことによって、論理的に思考する力の育成に適した教材なのである。

### ③パンフレットづくりを通して、情報の「価値づけ」を行う力を育む

今回は、説明文に書かれている情報の「価値づけ」を行う力を育むために、自分で作ったパンフレットを説明するという言語活動を行う。パンフレットづくりは、自らの情報の「価値づけ」に従って情報を再構成し、自分のとらえた情報の内容やその価値、さらには、それに対する自分の考えを発信することに適した手立てである。このようなパンフレットづくりを言語活動を具体化する手立てとして位置づけた単元では、一般的には、単元名を「ウミガメパンフレットを作ろう」といった活動が目的化されたものが多いが、今回は、「価値づけ力」の育成が目的となるため、「ウミガメのオリジナルパンフレットを説明しよう」とした。これには、パンフレットをどのように書いたか、というブルームの教育目標の「デザイン」に当たる情報の「価値づけ」を評価するという意図がある。

具体的に今回作るパンフレットは、観音開き型である。なぜこの形が適しているかというと、今回の説明文「ウミガメのはまを守る」が3つの大きな情報からなっていて、それら3つ情報に対して、自分なりの価値判断を行い発信することができるからである。つまり、パンフレットの中央には、自分がウミガメの浜を守ることを伝えるために、最も大切であると考えた情報を配置し、両サイドには、2番目、3番目の情報を分けてまとめ、発信することができるのである。

子どもたちは、パンフレットづくりという言語活動

を意識することによって、どの情報を1番の部分に書くか、また、その情報の中で何を強調するべきかを考えながら、説明文に書かれた情報を吟味し、価値づけを行う。これが読解の質を深める情報のつながりや比較、類推を含めた思考を保障するのである。パンフレットのどこに書くかを考えることが、3つの情報を比べて目的に応じた「価値づけ」を行うことにつながる工夫であると言える。この言語活動の工夫が「価値づけ力」の育成を促すことを期待して実践を行った。

### ○単元計画（全10時間）

	学習活動	教師の支援と手立て	評価の観点
(年間貫くめあて) めざせ！説明名人！(単元のめあて) オリジナルパンフレットを説明しよう！	<b>【めあて】「ウミガメのはまを守る」の3つの情報を一文で説明しよう！</b>		
	①全文を通して、「はじめ—中—終わり」に分け、大まかに内容をとらえる。	●音読を通して、全文を概観し、どこに何が書かれているかを確認させるために、「中」の部分に小見出しをつけさせる。	・「はじめ—中—終わり」に分け、「中」の3つの情報に小見出しを付けられたか
	<b>【めあて】3つの情報を比べてパンフレットのレイアウトを決めよう</b>		
第二次 ⑤	○どの情報が価値が高いと思うかを検討し、パンフレットにどのように配置するかを決める。 ○「中」にある情報の中で最も価値が高いと思われる情報の価値についてさぐる。(本時2/5)	●どの情報をパンフレットのメインに持ってくるかを検討させ、根拠、理由とともに小見出しをパンフレット下書きシートに書き添える。 ●3つの情報についてウミガメのはまを守ることを訴える上で価値ある理由や根拠をくわしく読んで、互いに意見を交流することによって吟味させる。	・3つの情報をパンフレットにどう配置するかを決定し、理由を書けたか。 ・仲間の理由を聞き、自分の読みや考えを深めたり、拡げたりできたか。
第三次 ④	<b>【めあて】「ウミガメのはまを守る」ことの大切さを伝えよう！</b>		
	○自分のパンフレットの情報配置について再度検討した上で、パンフレットを作成する。	●「中」の3つの情報のうち、自分が一番価値があると思うものを要約し、ながらまとめる。その情報を選んだ理由と根拠を合わせて書かせる。	・交流を生かして、説明文に書かれている情報の中で、重要な点を自分の言葉でまとめることができたか。
	○できあがったパンフレットの特徴を説明する練習をする。 ○互いのパンフレットの説明を聞き合いコメントを書く。一家で保護者に説明する。	●情報の配置の理由を中心に説明しながら、自分のパンフレットの紹介を行う場を設定する。 ●要約の仕方、理由の内容などに目を向けてコメントさせる。	・内容の良さ、伝え方の工夫とらえることができたか。

### ○単元の実際と考察

#### ①「ウミガメのはまを守る」の情報を捉える・価値づける

パンフレットづくりを始めるに当たって、子どもたちは、単元のめあてである「ウミガメのオリジナルパンフレットを説明しよう」の意味や目的を共有化して、自分の作ったオリジナルパンフレットに読んだ人が驚くような情報を載せたい、という目的意識をかき立てた。そして、第1次から子どもたちには、「びっくりするような情報を探そう」を合い言葉に、情報の「価値づけ」を行うため、情報の内容を大まかに捉える学習を行った。論理的思考を促すために全体から部分への思考の流れに即して、全体を俯瞰させるので



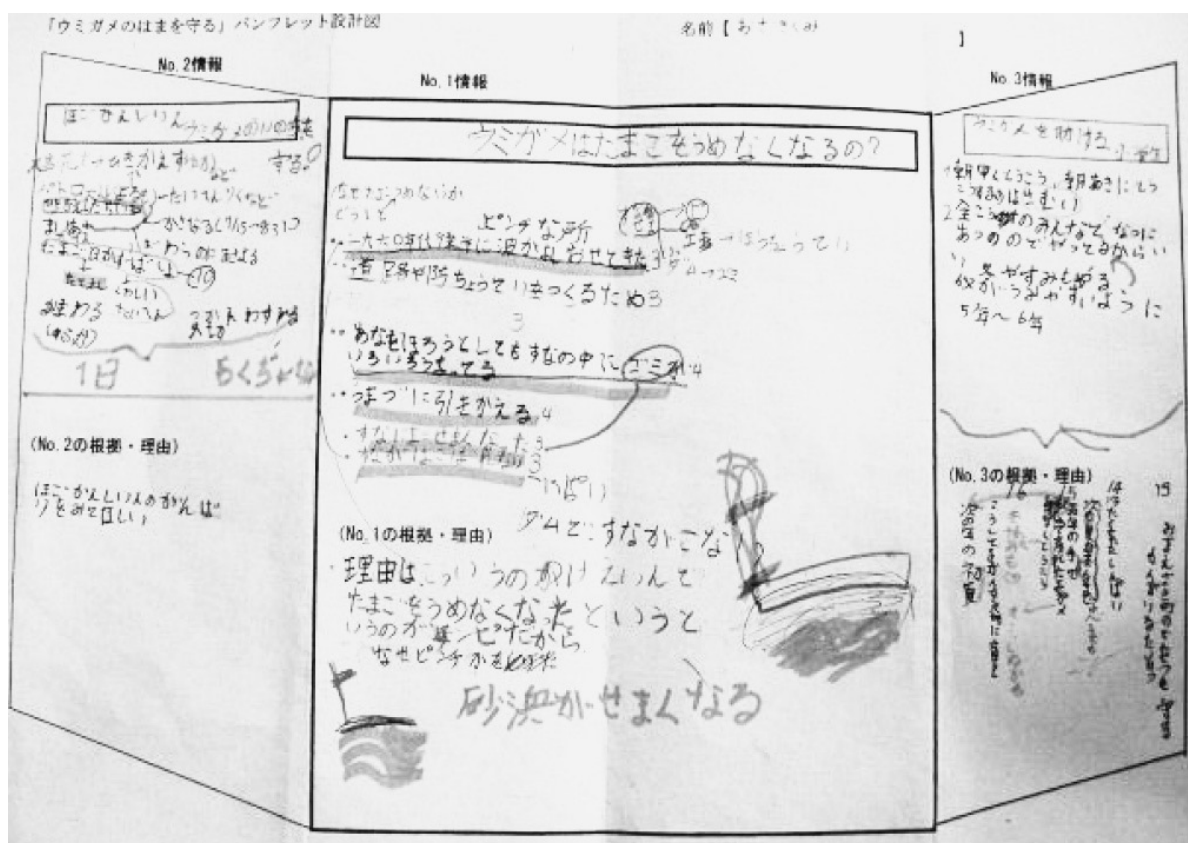
ある。そのために、先に示した文章構成をとらえるワークシートを書いて、全体を「はじめ—中—おわり」,「中」を3つの情報に切り分ける。そして、次はパンフレットづくりに直接つながるワークシートである「パンフレット設計図」を用いて1回目の「価値づけ」を行うのである。このシートには、単に情報を並べるのではなく、「価値づけ」を行わせる工夫がある。(写真②)

その工夫とは、このシートでは、パンフレットづくりを目指して、説明文の情報を大まかに3つに切り分け、その3つをどのようにパンフレットに配置するかを吟味させている点である。よりよいパンフレットづくりを目指して、このシートで仲間と交流を繰り返し、自分の「価値づけ」を揺さぶられることになる。これがブルームの教育目標の情報の分析の具体的な姿であると言える。ここでどの情報を自分の一番のものにするかを吟味することが「価値づけ力」の育成につながる学習活動になっている。実際、子どもたちは、これら3つの情報を配置を決めるに当たっては、仲間との交流によって、自分の「価値づけ」が揺さぶられながら「価値づけ」の質を高めている。そうした「価値づけ」の揺さぶりをさらに生み出すのが、次に示す工夫である。

この写真は、子どもたちがどの情報を自分のパンフレットの中心に持ってくるかについて、その見出しとともに付箋に書いて教室に貼り出した掲示である。(写真③) これによって、より多くの仲間の「価値づけ」を目の当たりにした子どもたちは、一層自分の「価値づけ」が揺さぶられ、再度自分の「価値づけ」を見直す。さらに、仲間の「価値づけ」の理由を表す「見出し」を読んで、仲間が本文のどの叙述に基づいて、「価値づけ」を行ったかを類推し、またそこを起点として互いに、意見の交流が活発化する。これが



写真③：仲間の「位置づけ」知る掲示



写真②：パンフレット設計図

一斉授業の必然性を生み出すのである。そこで、授業で自分の「価値づけ」を他者に説明を行う場を設定する。(写真④)



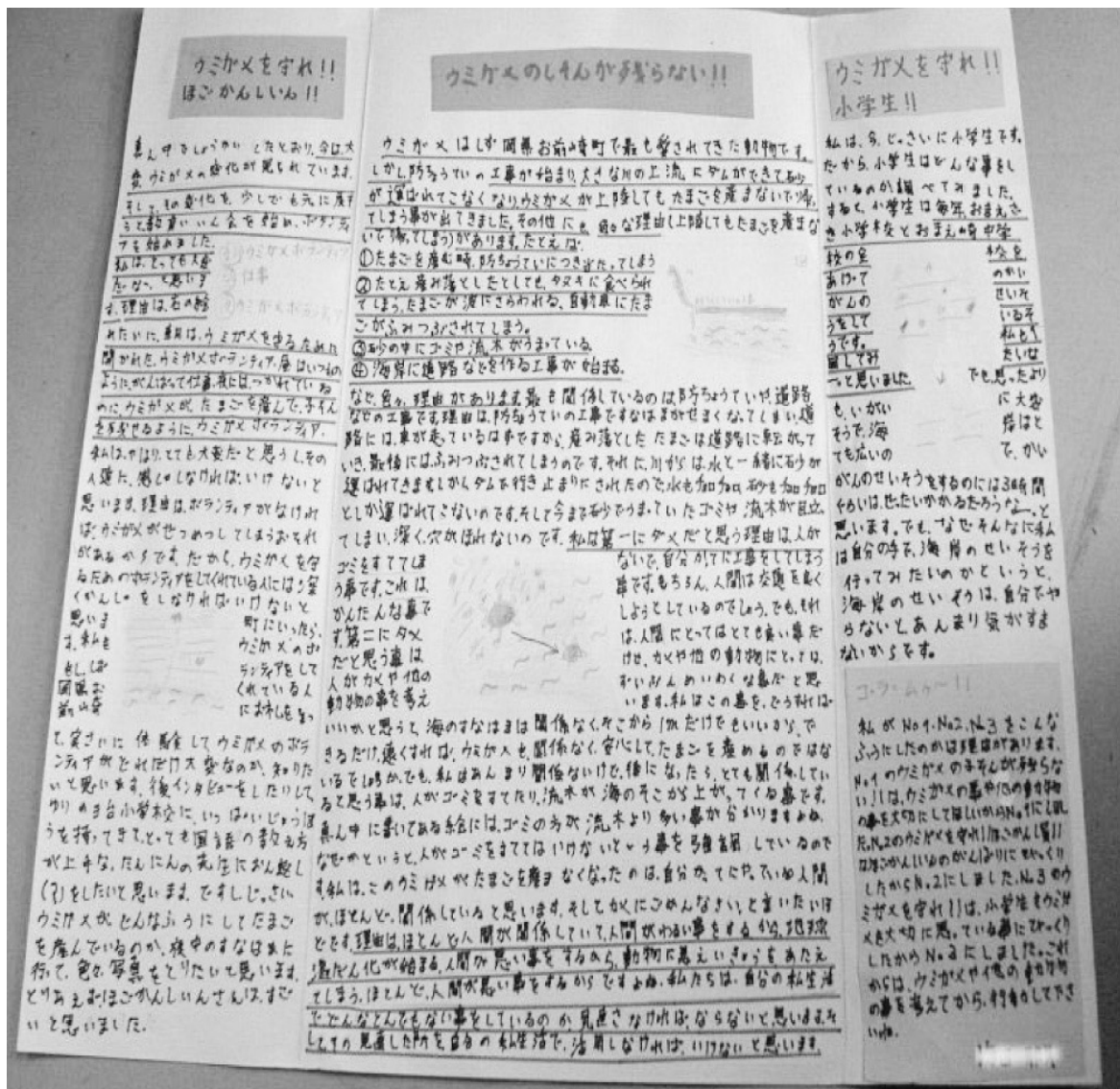
写真④：自分の「位置づけ力」を絵で説明する子ども

この写真のように自分がNo.1に「価値づけ」た情報を絵や言葉で説明する。そして、こうした交流を通して、説明したり、その説明を聞いて、メモをとったりすることによって、自分の考えがより強化される。

そうした子どもたちの思考の過程を表すのが次に示す説明を聞いてとったメモの実態である。(写真⑤)



写真⑤：説明を聞きながら自分の考えを作り上げたメモ



写真⑥：完成したパンフレット



これらの過程は、叙述をもとに類推を行い、より価値の高い情報として再構成するためには、必要なものである。こうした、交流による「価値づけ」の揺さぶりから、自らの「価値づけ」の再吟味、さらには、説明することによる強化を繰り返し行うことによって、「価値づけ力」が育まれていくのである。

また、言語活動を單元の中に位置づける際には、子どもたちの学習の必然性をつなぎ、言語活動の成果としての今回で言うパンフレットを作り上げさせるために、右に示したようなパンフレットづくりに直結するワークシートの工夫が重要である。このシートができあがることがいわゆるパンフレットの下書きができることになるのである。

自らの「価値づけ」の「交流→再吟味→強化」のサイクルを繰り返し、いよいよ、パンフレットを完成させる。その段階では、下に示すとおり、自らの「価値づけ」の根拠となった叙述や、いわゆる最初に目標にした読んだ人が驚くような情報については、線を引き、強調している。そして、コラムとして自分の「価値づけ」の意図・理由をまとめている。そして、ここで示した例に見られるように、下線の部分がそれぞれの情報の冒頭と最後に位置していることから、分かりやすく伝えるための文章構成を意識して、論述を行っていることもうかがえる。論理的思考力が育成されたことの現れの一つであると言える。

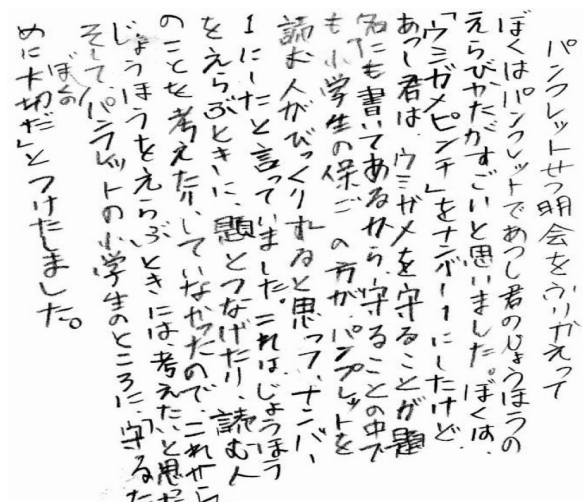
## ②パンフレットを説明する

パンフレットづくりという言語活動を具体化させる学習活動の工夫は、これまで述べてきたとおり、必然的に「価値づけ」を行わせることができる。そして、「価値づけ」は、いつも自らの考えを伝えることとセットになる。子どもたちの頭の中では、この情報を一番に価値づけると自分のパンフレットはこのようなという見通しを持ちながら、何度も情報を「価値づけ」、再構成しながら、パンフレットの完成に至った。この見通しをより具体的に立て、試行錯誤していくことができるようにすることが、その表現活動の質を高めていくことにつながっていく。それがデューイの言う「価値づけ」という思考手段の利点であり、「価値づけ力」の育成が表現の中に見られる論理的思考の現れを保障する。これが、「価値づけ力」が論理的思考力を支えるという理由である。だからこそ、パンフレットという言語活動の工夫においては、作る過程において行った交流、再吟味、強化のサイクルに加え、完成の後にさらに自分の「価値づけ」を確

かめたり、その価値づけについて再吟味する機会を設定することによって、その学習において育成される「価値づけ力」はより確かなものとなり、それに支えられる論理的思考力も高まるのである。今回の学習においては、パンフレットを説明することである。パンフレットに書いてある情報を説明するのではなく、自分の作ったパンフレットの特徴や良さを説明することによって、自分の「価値づけ」の再吟味、強化を行うのである。普通は、パンフレットの内容を説明することが一般的であるが、パンフレットを説明するとは、自分の価値づけの良さをアピールすることである。そして、パンフレットに載せた情報の内容について感想をもらうことはもちろんであるが、それ以上に、パンフレットの構成やできばえに対して意見をもらうことになる。特に構成に関して説明することは、自分がなぜこの情報をここに位置づけ、どの部分を特に知ってもらいたいのかということについて、語ることによって、自分の情報に対する「価値づけ」の根拠・理由、さらには、自分の考えとして比較、類推を通して、生み出したものの価値を、この説明文「ウミガメのはまを守る」を読んでいない人、ウミガメについてもよく知らない人にも伝えることができる。パンフレットを作る過程でも行った「価値づけ」の交流を繰り返し、相手を変えて行わせることによって、より多くの「価値づけ」にふれることがこの学習指導の工夫のポイントである。

完成した自らのパンフレットをお互いに説明し合い、再度自分のパンフレットの情報の「価値づけ」に対して吟味を行う。ここでは、仲間のパンフレットのコラムの部分の説明を聞いて、多様な「価値づけ」に触れるとともに、多様な「価値づけ」の吟味の過程にも触れることになる。このような言語活動を終えて、振り返りの段階において、再度自分の言語活動の意味や、生み出した成果について「価値づけ」を行わせることが、「価値づけ力」の育成につながるのである。そのため今回は、完成したパンフレットの説明交流会の後に、さらに、パンフレットを見直し、仲間の「価値づけ」を取り入れて、パンフレットのコラムの部分にある「価値づけ」の根拠・理由の部分に改良を加える場を設けた。そこでは、自分の情報の「価値づけ」について再度吟味を行い、「価値づけ」の根拠・理由の補強をさせる振り返りを書かせた。その一つを紹介しておく。(写真⑦)





写真⑦：最終のふり返し

このふり返りが、子どもたちの「価値づけ」の最終段階である。というのは、子どもたちは、パンフレットを作った段階でも、自分の情報の「価値づけ」を内容のレベルでは判断できている。しかし、その「価値づけ」の意義や、それがどのような意味を持っているのかまでは深く理解できているとは言えない。そこで、このように「価値づけ」そのものを交流し、ふり返る場を設定することによって、「価値づけ」としてどのようなものがよりレベルの高いものになるのかと言うことにまで、踏み込んで考えたり、よりレベルの高い「価値づけ」のための視点を学んだりすることができるのである。上のふり返りでは、題名とつなげた「価値づけ」や読み手へのインパクトを考えた「価値づけ」といった具体的な「価値づけ」の方法を学んだということを記録している。さらに、この学習者は、仲間の「価値づけ」の良さを取り入れるために、自分のパンフレットに情報を付け加えている。これは、自分の「価値づけ」を見直し、より質の高い「価値づけ」に変更を加えたということである。

このように「価値づけ」を行うという思考活動に焦点化して、その思考について絞ってふり返らせることによって、論理的思考という目に見えないものの高まりをより具体的に自覚することにつながっていくのではないかと考えられる。

## V. まとめ

今回取り上げた実践を通して、論理的思考力の育成を支える「価値づけ力」の育成を目指す学習指導や学習過程の工夫について述べてきた。今回の実践では、「価値づけ」の内実を明らかにすることによって、論

理的思考力の具体的な指導の在り方を探ってきた。その成果としては、「価値づけ力」の育成においては、「交流→再吟味→強化」のサイクルの有効性が確認できた。さらには、そのサイクルにいかにも必然性を持たせるかについて、工夫が必要であることも実感することができた。また、「パンフレットを説明する」ことによって、ブルームの教育目標である⑤総合の中でも「デザイン」に相当する「価値づけ力」の育成につながる子どもたちの学習活動を通して確認できたことも、論理的思考力の育成をする上で具体的な工夫の提案となることを期待するとともに、今後の実践を作る上での可能性を感じた。

さらに、今後も論理的思考力の高まりをより確実に子どもたちに保障していくために、学習活動において、「価値づけ」という思考に焦点化した実践の分析を継続して行っていく。また、「価値づけ」を必然的に行うことができる言語活動や学習過程の工夫のバリエーションを増やすことを目指していきたい。そのために学校現場に協力を依頼し、授業づくりに密着した研究を続けていきたいと考えている。そうした取り組みの中で、論理的思考を支える「価値づけ力」の育成を目指す学習指導の工夫を明らかにし、学習指導要領が求める言語活動の充実による思考力・表現力・判断力の育成を具現化していく提案を行っていききたいと考えている。

## 参考文献

- ・ジョン・デューイ『価値づけの理論』（上）（下），岩田浩訳『大阪産業大学論集（人文・社会科学編）』，2007年
- ・黒上晴夫『生き方学習構成要素を考える』，関西大学研究紀要，2004年
- ・伊崎一夫・阿部秀高『移行期からはじめる新しい国語の授業づくり1～6年』，日本標準，1-136頁，2009年
- ・長崎伸仁「筆者を読む」から論理的記述力へ，教育学国語教育No.704，pp.104-109，明治図書，2009
- ・有田和臣『正確な読み方技術』，明治図書，1-268頁，1995年
- ・小森 茂『新小学校国語科重点指導事項の実践開発』，明治図書，1-119頁，2010年